

第四十七表 中之島噴出

年月日	同上(西曆)	記 事
大正三年一月	一九一四年一月一日	櫻島大破裂ノ後、山頂舊噴孔底ノ沼平ヨリ泥土ノ噴出アリ、長四間、幅二間、深二尺五寸ノ池ヲ作レリ。(大森ノ調査ニヨル)

第四十八表 諏訪之瀬島噴火

年月日	同上(西曆)	記 事
文化十年	一八一三年一月一日	噴火破裂シテ居住ノ民人悉ク他ノ諸島ニ逃レ避ク其後噴煙絶ヘズ因リテ明治十六年頃迄ハ無人島トナル、此ノ噴火ノトキ鎔岩ヲ島ノ南西ナル <sup>サコ</sup> 追尻 <sup>ツリ</sup> 及ビ水河 <sup>スイガ</sup> 方面ニ流出シテ海中ニ突出タシリ、當時新タニ生ジタル噴火口ノ直徑ハ「三百メートル」ニ達ス。(大森房吉出ノ復命書)
明治十七年	一八八四年一月一日	明治十年頃種子島ニテハ三日間程續キテ音響アリ遠キ砲聲ノ如クニシテ鹿兒島砲戰ノ響ナランカナド語リ合ヒシガ後ニ至リテ諏訪之瀬島ノ噴火ナルコト判明セリト云フ(鮫島鐵馬氏ノ談ニヨル) 明治十七年大噴火アリ鎔岩ヲ島ノ北東ナル <sup>サツジ</sup> 作地 <sup>サツジ</sup> 方面ニ流出シテ海岸ニ達セリ、其ノ前後モ屢々噴火シ、中之島、種ヶ島、鹿兒島市ニ迄鳴動ヲ傳ヘタルコト稀ナラズ。明治十七年ノ

年月日

同上(西曆)

記事

噴火口ハ極メテ美麗ニシテ直徑約四百五十「メートル」ナル正圓形ノ圓錐狀ヲナス。(大森房吉出 張復命書)

明治十八年五月上旬諏訪之瀬島附近ヲ航行セルトキ煙勢最モ強ク夜間之ヲ眺メバ恰モ煙臺ノ下ニ在ルガ如ク該島ヨリ二十里ヲ距ツルモ尙ホ赤色ノ火光ヲ認ムルヲ得タリ。(地學協會報 告書第七卷)

鹿兒島縣南海ノ鳴動ハ初硫黃島近海噴火破裂スベキ響ナリトノ風説ニ付其實否及島地ノ情況視察ノ爲メ曩ニ同縣ヨリ派遣セシ官吏ハ先硫黃島迄渡航セシガ右鳴動ハ該島近海ニ非ズシテ尙遙ナル南方ニ當リ鳴動セルニ付キ其實地ヲ視察セントスルモ素ヨリ該島以南七島海ハ波濤激烈航海不便ノ時ナルヲ以テ渡航スルコト能ハズシテ歸應シタリ而シテ右鳴動ハ現ニ諏訪之瀬島ニシテ目今(明治十八年二月二十日)ハ其響稍々止ミタルガ如クナリシモ人或猶間々鳴動スト云フ者アリ、文化十年噴火破裂シテ居住ノ人民悉ク他ノ諸島ニ避ケシ以來今ニ噴煙絶ヘズシテ無人島トナリシガ明治十六年四月大島郡笠利方赤木名村平民森仲仙ノ首唱ニテ數人該島ニ渡リ土地ヲ耕シ粟及甘蔗等ヲ植付ケタリ、昨年三月同縣廳ヨリ派遣セラレタル勸業課長白野夏雲ノ調査セシ所ニ據レバ從來ノ火口ハ脇山ノ裏面其頂上ヨリ二三分ノ下ニ在リ其口徑概百步許ト見エ吐煙常ニ其口ニ滿チ吐口ハ恰モ綿ヲ繰ルガ如ク降灰累層縱横ニ紋ヲナシ一山全ク灰色ニシテ風ニ隨ヒ煙ノ向フ所降灰十里ニ及ベリ、前時噴火ヲ避ケテ惡石島ニ移

轉セシ老婆有川萬鶴肥後福ノ兩名今猶惡石島ニ存命スト云ヘリ、而シテ去ル一月中大島郡ヨリ歸航ノ途次實見シタル縣官福井信篤ノ語ル所ニ據レバ遠ク一里餘ヲ隔テ、觀察シタレバ今回鳴動ノ詳細ヲ説ク能ハザリシモ噴火大小數個ニシテ其大ナルモノハ數個ノ踏鞴火ヲ合セタルモノ、如ク其火焰ノ噴出スルハ概ネ時間二十分内外ニ噴出シ百間許ニ上リ其震響實ニ驚クベシト云ヘリ。本年一月十二日午前一時頃ヨリ南海ノ方位ニ當リ屢々鳴動シ恰モ遠ク戰地ノ砲聲ヲ聞クガ如ク一聲一聲紙障ニ響キシモ、其原因ヲ知ルモノナキヲ以テ同月廿一日實地調査ノ爲メ官吏ヲ派遣シタルニ其狀況前記ノ如ク二月ニ至リテ漸次鎮定セリ。(日本地震學會報告書)

明治二十二年十月二日大島名瀬港ニテ午前一時三十分頃東北ニ當リ遠雷ノ如キ響アリテ微震シ約十分間ヲ經テ砲聲ノ如キ響アリテ一分間震動シ其レヨリ強震三四回ニシテ屢々鳴動ス、爾後十餘日間ハ一日ニ五六回ツ、ノ震動アリ漸次減少シテ十三日ニ至リ全ク止ム、當時諏訪之瀬島噴火ノ報アリタレバ其ノ空氣波が大島ニテモ鳴動トシテ感ゼラレタルモノナルベシ。(大森ノ調査ニヨル)